

日本語名詞列挙構文の 韻律についてのおぼえがき

国立国語研究所 言語行動研究部 研究員 前川喜久雄

要旨 日本語名詞列挙構文の韻律的特徴を内省にもとづいて検討した。名詞句末尾のイントネーションは随意性がつよく本質的特徴とはいえない。一方、ポーズおよび句頭の上昇の配置には固定的な特徴をみとめることができる。また名詞列挙構文では一般的に downstep が生じないが、それがこの構文の要求するフォーカス構造に起因することを述べた。

1 目的

本報告書のなかには日本語をはじめとするいくつかの言語における「イヌ、ネコ、ウマ、ウシ…」のような名詞を列挙した構文（名詞列挙構文）の韻律に関する分析がふくまれる予定である。1991年12月25日のミーティングで本報告書所載原稿の査読をおこなった際、インドネシア語話者の日本語イントネーションの分析に端を発して一体何が日本語名詞列挙構文の「正しい」イントネーションかという問題が議論された。本稿はその際に筆者がのべた見解にその後の検討をくわえてまとめなおしたものであり、日本語名詞列挙構文の主要な韻律的特徴をまとめることを目的としている。

標準的日本語（東京方言）のシンタクスは名詞を列挙するためにいくつもの方法を許容している。ここではそのなかから「イヌ、ネコ、ウマ、ウシ…」のように名詞単体を列挙する形式（ゼロ形式とよぶ）と助詞トをもちいた「イヌトネコト…」の形式（ト形式）をえらんで分析の対象とする。ゼロ形式とト形式のあいだの意味の相違は分析の対象としていないが、この点が問題になることはないだろうとおもう。

2 分析

ゼロ形式およびト形式による名詞列挙構文の韻律に関して興味をひかれるのは(a)名詞句間のポーズ、(b)句頭の上昇、(c)有アクセント語連鎖における downstep、(d)名詞句末尾のイントネーションの4点である。以下ではこれらの要素について順次分析をおこなう。提示する例文はすべて作例であり、一部には筆者の周辺の標準的日本語話者の発話を観察している部分もあるものの、例文の適格性や自然性についての判断はもっぱら筆者自身の発話を内省した結果である。なお、本報告書所載の谷口論文も名詞列挙構文をあつかう予定である。そこでは音声資料の音響分析結果についての報告がおこなわれるはずであるので併読していただきたい。

2.1 ポーズ

2.1.1 ゼロ形式におけるポーズ

ゼロ形式による列挙では列挙された名詞のあいだにポーズがおかれるのが自然である。い

ま「何がいるの？」に対する回答としての「ネズミ\$ラクダ\$ライオンがいます」(\$はポーズ位置をあらわす)を内省の対象としてみると、まったくポーズをおかない「ネズミラクダライオンがいます」はあきらかに異様な印象——ある種の「棒読み」との印象——をあたえる発話になってしまう。

ところで上記の例文中の名詞はすべて無アクセント語(無核語)である。有アクセント語をゼロ形式で列挙する場合には多少事情がことなってくる。たとえば「アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウがいます」('はアクセントの位置)の場合をかんがえると、ポーズをおく発話が自然である点は無アクセント語と同様であるが、名詞間にポーズのない「アラ'イグマヤマア'ラシインド'ゾウがいます」は無アクセント語の列挙の場合ほど異様とは感じられない。列挙される名詞のアクセントの有無に起因する許容度の差異は次節で検討する「句頭の上昇」と関係して生じている。

ポーズの有無が発話の自然性につよく影響するのに対し、ポーズのながさは二次的な影響をおよぼすにとどまるようである。しかし一定限度をこえて長すぎるポーズも異様な印象をあたえることはたしかであり、その限度に関しては今後実験的な検討をくわえる必要がある。ところで、ここまで問題にしてきたポーズは、日本語の句レベル音韻規則が要求する義務的なポーズとかんがえられる。しかし現実のコミュニケーション場面においては義務的なポーズのほかには偶発的ないいよどみによるポーズも観察される。たとえば「ネズミ、ラクダ、」と発話した時点で次に発すべき語「ライオン」をおもいつけずにいるような場合に生じるポーズである。義務的なポーズと偶発的なポーズのあいだには量的な差も存在すると想像されるが(偶発的ポーズの方がながくなりうる)、いいよどみに起因するポーズも無限にながくなるわけではない。相当長時間にわたって語の検索が完了しない場合には「ネズミ、ラクダ... えーと何だっけ」のように沈黙をやぶることを目的とした何らかの発話が挿入されるのが自然である。

2.1.2 ト形式におけるポーズ

つぎにト形式の場合を分析しよう。ト形式名詞句(名詞+ト)のあいだのポーズは義務的ではない。ポーズを一切ふくまない「ネズミとラクダとライオンがいます」がまったく自然である点でト形式による名詞列挙はゼロ形式によるものといちじるしい対照をなす。ト形式による列挙では名詞句間にポーズをおくこともゆるされる。興味ぶかいことに、その場合名詞句のピッチ形状がポーズなしの場合とはいささか相違するようであるが、この問題については2.4節でまとめて分析することにする。

2.2 句頭の上昇

2.2.1 句頭の上昇とは

すでによく知られているであろうが、標準的日本語(東京方言)における句頭の上昇とは頭高型以外のアクセント型の語(平板型・中高型・尾高型、つまり第一音節にアクセント核のないすべての語)が韻律句の冒頭に位置し、なおかつその語の第一音節が特殊拍をふくまない場合に語頭モーラのピッチがひくめられ、その結果、第1モーラから第2モーラに

かけてピッチの上昇が生じることをいう。のちに 2.3.2節でのべるように、階層的な韻律構造を想定する音韻理論では、上記の説明で韻律句とよんだ韻律構造上の単位をアクセント句 (accentual phrase) としてその他の階層の韻律句から区別する必要がある。しかしいわゆる国語学のアクセント研究では階層的な韻律構造を想定することがまれであり、通常ただ1種類の韻律句だけを見とめて、それを「句」とよぶことが定着している(川上1961)。句頭の上昇という術語における「句」の語もこの意味でもちいられている。

2.2.2 名詞列挙構文における句頭の上昇

ゼロ形式による構文では各名詞句の冒頭で句頭の上昇が義務的に生じるといえる。平板型の語をもちいて例示してみると 1a) はまったく自然であるが、1b) はきわめて不自然である。(\$ は義務的ポーズの位置をあらわし、●/○ は名詞のピッチの、▲/△ は助詞のピッチの相対的高低をしめしている。)

ネズミ \$ ラクダ \$ シマウマがいます。

1a) ○●● ○●● ○●●●▲

1b) ??○●● ●●● ●●●●▲

これに対してト形式では句頭の上昇の有無は義務的にさだまるものではない。平板型の場合 2a) のように列挙された名詞句全体が一韻律句 (= 「句」) を構成することもあれば、2b, 2c) のように各名詞句の冒頭に句頭の上昇が生じる発話もともに可能である。また名詞句間のポーズも義務的に必要とされるわけではない。

2a) ネズミとラクダとシマウマがいます。

○●●▲●●●▲●●●●▲

2b) ネズミと \$ ラクダと \$ シマウマがいます。

○●●▲ ○●●▲ ○●●●▲

2c) ネズミとラクダとシマウマがいます。

○●●▲○●●▲○●●●▲

ところで、さきに 2.1節で、ゼロ形式による無アクセント語の列挙ではポーズのない発話のはっきり異様と感ぜられるのに対して、有アクセント語のポーズなしでの列挙はさほど異様と感ぜられないことを指摘した。句頭の上昇という観点からこの問題を再度分析してみよう。3a) に対して 3b) が異様と感ぜられる原因はポーズの不在に直接起因するというよりも、むしろポーズと同時に実現されるべき句頭の上昇が存在しないためではないかと推測される。

3a) ネズミ \$ ラクダ \$ シマウマがいます

○●● ○●● ○●●●

3b) ??ネズミラクダシマウマがいます

○●●●●●●●●

すでにおおくの研究者によって指摘されていることであるが、標準的日本語では無アクセント語の連鎖がしばしば韻律上ひとつの無アクセント語と同様に発音される。いまこの現象を藤崎博也氏の用語にしたがってアクセント・サンディとよぶとすると、アクセント・サンディを生じた無アクセント語連鎖はその途中に音調の変化がないために、韻律のうえからは語のあいだの境界を検出することが不可能である。これに対して、有アクセント語の場合はポーズをふくむ 4a)の発話はもちろん、ポーズなしの 4b)においても矢印の箇所句頭の上昇が生じているために語境界の検出が可能である。

4a) アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウがいます。

○● ○○○ ○●● ○○ ○●●● ○○△

4b) アラ'イグマヤマア'ラシアフリカ'ゾウがいます。

○● ○○○○●● ○○○●●● ○○△

↑ ↑ ↑

名詞列举構文がその名称のとおり名詞を並列的に列举するための構文である以上、何らかの方法で列举された名詞の境界が検出されなければならない。ト形式ならば助詞というのかがかりが明示されているのであるが、ゼロ形式では語形上のでがかりが存在しないので、境界の表示は韻律特徴にたよらざるをえない。したがってゼロ形式によるポーズなしの無アクセント語連鎖のようにアクセント・サンディによって語境界を表示する韻律特徴がうしなわれる発話をさけるのは当然といってよい。そして、おなじくゼロ形式ではあっても有アクセント語連鎖のように、アクセント・サンディの効果もおよばず、またアクセントや句頭の上昇による語境界検出の可能ものこされている場合には、ポーズなしの発話が許容されるのである。それではゼロ形式によるポーズなしの無アクセント語連鎖においても句頭の上昇を実現すれば、その発話の許容度はたかまるだろうか。

5)??ネズミラクダライオンがいます

○●●○●●○●●●

現実には 5)のような発話は観察されないようであるし、また実現されたとしても自然な発話とは感じられない。この事実はアクセント・サンディが(義務的)ポーズ挿入にききだって適用される規則であることを示唆している。

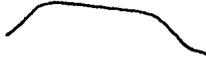
2.3 Downstep

2.3.1 Downstepとは

以下で考察の対象とする downstep とよばれる韻律現象はかならずしもひろくしられたものではないとおもわれるので、最初にやや詳細な解説をおこなうことにする。Downstep(ないし catathesis)とは韻律構造に関する理論で intermediate phrase とよばれる特定の韻律句の内部で複数の有アクセント語が連続する場合に各アクセントの音響的な実現値が次第に低下してゆくことをいう(Pierrehumbert and Beckman, 1988)。たとえば「おいしい蕎麦屋」と「うまい蕎麦屋」を比較すると両者に共通する有アクセント名詞「蕎麦屋」の

アクセント（ピッチの下降）の音響的な実現は下図に模式的にしめしたように先行する形容詞が無アクセント語「おいしい」であるか有アクセント語「うまい」であるかによっておおきくことになってくる。

3a) おいしいそば'や



3b) うま'いそば'や



3個以上の有アクセント語つづく場合 4a)のように3個のアクセントのあいだでdownstepが相乗的に生じることもあるが、その一方 4b)のように1番目と2番目のあいだのdownstepがうちけされることもある。

4a) うま'いそば'やのかもな'んばん(うまい蕎麦屋の鴨南蛮)



4b) うま'いふる'いそば'や(うまい古い蕎麦屋)



4a) と 4b)の相違を決定しているのは純粹に音韻的な条件ではなく、名詞句の統語構造のちがいである。4b)の名詞句が左枝分れ構造(左から右への順次修飾)をなしているのに対して 4a)の名詞句は右枝分れ構造(左の要素が中間の要素をとばしてより右側の要素を修飾する)をなしている。そして連体修飾句の内部に左/右枝分れ構造の境界が存在する場合 downstep の効果はその境界をこえることができないのではないかとかんがえられている(Kubozono 1988, Selkirk and Tateishi 1990)。Downstep を阻止する要因は上述の統語構造だけではない、発話中の特定要素にフォーカスがおかれた場合にも downstep は阻止されるとかんがえられている。

5a) うま'いめし'やがあ'るんですか?

5b) めし'やじゃなくて、うま'いそば'やがあ'るんです。



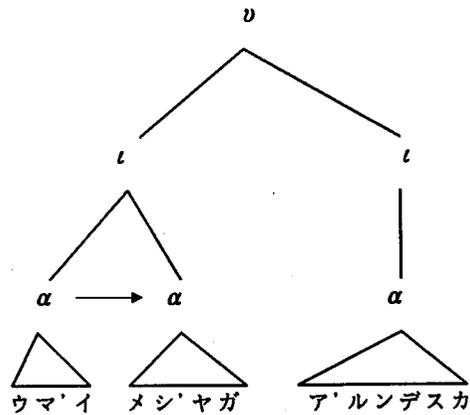
上記の談話では 5a)のあやまりを訂正するために 5b)では「そばや」の語にフォーカスがおかれ、その結果特別に強調されて発音されるのが自然である。その際、有アクセント語「そばや」には、この語が左枝分れ構造のなかで有アクセント語である「うまい」のうしろに位置しているにもかかわらず、downstep が生じない。

2.3.2 Downstep と階層的韻律構造

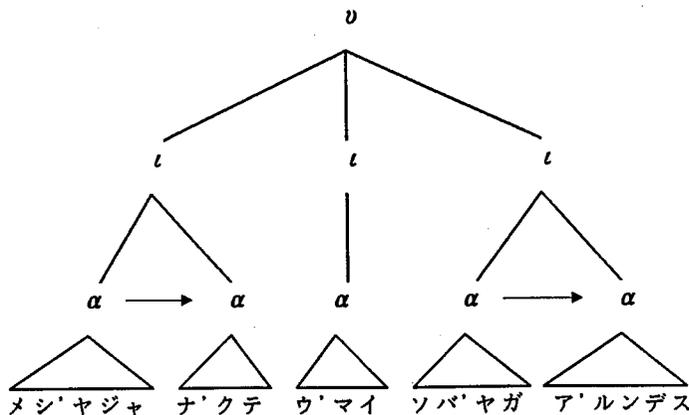
さきに一部言及したように最近の音韻理論では、表層で観察されるピッチ形状を説明するために階層的な韻律構造を想定することが一般的である。理論の細部についてはさまざまな議論がかわされているが、ここでは一例として Pierrehumbert and Beckman(1988)の提

案するモデルをとりあげよう。彼女らのモデルでは韻律構造のふかさには上限がさだま
ており (strict layer hypothesis)、tree の特定の接点がどのようなラベルをもつかは、
韻律構造中でその接点の位置するたかさから自動的に決定することができる。下図は発話
5a), 5b) の韻律構造であるが、発話全体を支配するもっとも上位の接点には utterance (υ)
のラベルがあたえられており、逆にもっとも下位の接点には accentual phrase (α) —す
なわちただか1個のアクセントが存在しうる領域で同時にその先頭で句頭の上昇が生じ
る領域— のラベルがあたえられている。(実際には α よりも下位のラベルとして音節を表
示する σ やモーラを表示する μ があるが、ここでの議論には無関係なので省略している。)
そして α と υ の中間に位置する ι は intermediate phrase とよばれ、これが downstep
の作用域を表示している。

発話 5a) の韻律構造



発話 5b) の韻律構造



上記の韻律構造中の矢印はそこで downstep が生じることをしめしている。発話 5a, b) を

比較すると 5a)では／ウマイメシヤ／がひとつの intermediate phrase を形成しており、そこで downstep が生じるのに対し、5b)では／ウマイソバヤ／がふたつの intermediate phrase に分割されている。すでにのべたとおり／ソバヤ／には対比のフォーカスがおかれているため／ウマイ／と／ソバヤ／のあいだには downstep が生じないの。この事実を音韻表示に反映させるために／ソバヤ／の位置にあたらしい intermeditate phrase が導入されているのである。一般に発話中のある要素にフォーカスがおかれると、そこからあたらしい intermediate phrase がはじまる。

2.3.3 ゼロ形式における downstep

それでは、名詞列挙構文における downstep の生じ方を検討しよう。Downstep は有アクセント語の連鎖に固有の現象であるから、本節では有アクセント語のみを考察の対象とする。有アクセント名詞がポーズをともなったゼロ形式で列挙された 6a)では downstep は観察されない。列挙された名詞句が後続する名詞を修飾する 6b)も同様である。ポーズなし句頭の上昇ありの 6c, d)の場合も、普通には downstep なしに発話される。ポーズなしの発話では downstep をともなう発話が不可能というほどではないが、名詞列挙構文としては不自然に聞こえる。

- 6a) アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウがいます。
 6b) アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウの写真。
 6c) アラ'イグマヤマア'ラシアフリカ'ゾウがいます。
 ↑ ↑ ↑
 6d) アラ'イグマヤマア'ラシアフリカ'ゾウの写真。
 ↑ ↑ ↑

2.3.4 ト形式における downstep

つぎにト形式の場合を検討する。7a)においても 7b)においても普通には downstep なしの発話がおこなわれる。Downstep をともなう発話も不可能ではないが、ここでもやはり名詞列挙構文としては不自然さを感じさせる。つまり 7a, b)に関する内省は 6c, d)と一致している。

- 7a) アラ'イグマとヤマア'ラシとインド'ゾウがいます。
 7b) アラ'イグマとヤマア'ラシとインド'ゾウの写真。

何故 downstep をともなう名詞列挙構文には、なにがしかの不自然さが感じられるのであろうか？その理由は名詞列挙構文の統語論および意味論上の特性にみいだすことができるとおもわれる。さきにものべたように名詞列挙構文は名詞を「並列的に」列挙するための構文であり、特別の文脈が設定されないかぎりすべての名詞は原則として同等の資格で列挙される。たとえば 7b)の発話のもっとも普通の解釈は3種類の動物を別々にうった3枚の写真についての言及であろう。そしてこの解釈にもとづく発話に downstep が生じないということは、この解釈を反映する intermediate phrase の構造が 8a)であることを

示唆している。

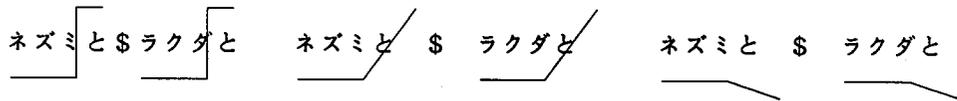
- 8a) (アラ'イグマと)(ヤマア'ラシと)(インド'ゾウ)の写真
- 8b) (アラ'イグマとヤマア'ラシとインド'ゾウ)の写真
- 8c) (アラ'イグマと)(ヤマア'ラシとインド'ゾウ)の写真
- 8d) (アラ'イグマとヤマア'ラシ)と(インド'ゾウ)の写真

すでに説明したとおり、現在までにしられている intermediate phrase の分割要因は左右枝分かれ境界がフォーカスの存在である。したがって各名詞句が「並列的」に解釈される 7b)の構文に左右枝分かれ境界の存在を想定することが不可能である以上 8a)における intermediate phrase 分割の要因はみつつの名詞句すべてにフォーカスがおかれているためとかがえるのが妥当である。ちなみに 8b), 8c), 8d) の韻律構造はいずれも downstep をひきおこすが、これらの発話における名詞句の関係は「並列的」とはいいがたい。8c) はアライグマがうつつた1枚の写真とヤマアラシとインドゾウがうつつたもう1枚の写真についての言及、8d) はアライグマとヤマアラシがうつつた1枚の写真とインドゾウがうつつたもう1枚の写真についての言及と解釈されるのが普通であろう。この場合、名詞句間の統語構造に左右枝分れ境界が存在することによって intermediate phrase の分割がもたらされたものと解釈されるわけである。8b) はアライグマとヤマアラシとインドゾウがうつつた1枚の写真を他のおおくの写真のなかから選択するような場合の発話であり、個々の名詞句にはフォーカスがおかれていない発話である。

以上 downstep をともなうト形式名詞列举構文の自然性が低下する原因をフォーカスにもとめる分析をおこなった。この分析はひとつの仮定をくわえるだけでゼロ形式についてもそのまま適用することができる。それは intermediate phrase がポーズをこえることができないう仮定である。ポーズをともなうゼロ形式列举 (6a, b) では一切 downstep が観察されなかった。これは仮定の帰結そのものである。(ポーズをともなうト形式の発話に関しても当然おなじ説明が適用可能である。)そしてポーズなし句頭の上昇ありのゼロ形式列举 (6c, d) ではポーズによる障害が存在しないために downstep をともなう発話が可能となるのだが、ト形式の場合とおなじくその韻律構造が名詞列举構文の要求するフォーカス構造に適合しないことが原因となって不自然な発話と内省されるのである。

2.4 名詞句末尾モーラのイントネーション

列举された名詞句の末尾モーラにはしばしば随意的な局所的ピッチ変化が生じる。問題となるのはn個の名詞が列举されたうち最初のn-1個の名詞の末尾であり、ゼロ形式の場合は名詞の最終モーラ、ト形式ならば助詞トがピッチ変化の領域となる。ピッチ変化の方向には上昇と下降との2種類がある。さらにこまかく分類すると、上昇に関しては問題となるモーラ全体のピッチが一様に上昇する場合と、モーラ冒頭はひくくはじまりその後連続的に上昇するモーラ内上昇とがみとめられるが、以下ではこのふたつを区別せずに論じることとする。一方、局所的な下降はつねにひきのぼしをともなうモーラ内下降として実現されるようである。



さて、上昇と下降との分布は同一でない。すでに内省の対象とした例文のうち自然な韻律と内省されたものを対象に上昇／下降イントネーションの分布をしめす。○はそのイントネーションがゆるされることを×はゆるされないことをしめす。

		上昇	下降
9a)	ネズミ\$ラクダ\$シマウマがいます	○	×
9b)	ネズミとラクダとシマウマがいます	×	×
	↑ ↑ ↑		
9c)	ネズミと\$ラクダと\$シマウマがいます	○	○
9d)	アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウがいます	○	×
9e)	アラ'イグマとヤマア'ラシとアフリカ'ゾウがいます	×	×
9f)	アラ'イグマと\$ヤマア'ラシと\$アフリカ'ゾウがいます	○	○
9g)	アラ'イグマヤマア'ラシアフリカ'ゾウがいます	×	×
9h)	アラ'イグマ\$ヤマア'ラシ\$アフリカ'ゾウの写真。	○	×

ポーズをともしない発話(9b, e, g)には上昇も下降もゆるされない。ポーズがあれば(a, c, d, f, h)上昇はゆるされるが、下降がゆるされるとはかぎらない。下降がゆるされるのはポーズをともしない形式(c, f)の発話のみである。なお、名詞句末尾での局所的変化の一種としてピッチ変化をともしないモーラ長の単なるひきのぼしもおこなわれうるが、その分布は上昇イントネーションの分布と同一ではないかと内省される。ともかく上昇イントネーション(ないし単なるひきのぼし)と下降イントネーションとはあきらかに別個の条件にコントロールされていることがわかる。興味ぶかい現象であるが、くわしい検討は他の機会にゆずることにしたい。

3 まとめ

今回の分析はもっぱら内省にたよって資料をえているので一個の論文とするにはいろいろな不備がある。今後実験的検討や自然な発話のより精密な観察をおこなうべきであるが、そのために必要な仮説構築の意味もふくめて日本語学習者音声の分析を想定した暫定的な結論をのべることにする。

今回とりあげた4種の音声学的・音韻論的特徴のうちもっとも耳目にとまりやすいのは名詞句末尾モーラのイントネーションであるかもしれない。しかしこの特徴は今回とりあげた特徴のなかでもっとも随意性のつよい現象であり、また性別などの社会的要因による変異のはばもひろい。実際、筆者はゼロ形式による名詞列挙で名詞句末尾にモーラ長のひきのぼしをともしない上昇イントネーションをもちいる東京語話者がいるとは想像していなかったのだが、この報告をまとめだしてから東京出身の同僚にこの種の発話をおこなうひと

がいることを発見しておどろいたくらいである。したがって、これをもって標準的日本語の名詞列挙構文の韻律的特徴の本質を論じるのはナンセンスというにちかい。日本語学習者の日本語発話を分析する際にもこの特徴に必要以上に注目すべきではないだろう。

つぎに downstep であるが標準的日本語の名詞列挙構文には原則として生じないとみなしてよい。くりかえしになるが 2.3.3 節で指摘したように現実には名詞列挙構文が downstep をともなって発話される場合が絶無とはいえない。しかしそのためには、動物をうつしたおおくの写真が眼前にならべられている状況で、すべての写真の内容を知悉している話者が同様に写真の内容を知悉している他の話者にむかって「アライグマとヤマアラシとアフリカゾウ」の写真に言及するといった特殊な文脈が必要になるだろう。われわれが分析の対象とした典型的な名詞列挙構文ではすべての名詞句にフォーカスがおかれ、その結果 downstep は抑止されるとかんがえてさしつかえない。

結局、句頭の上昇とポーズのふたつが名詞列挙構文の韻律の本質的特徴をなすのではないかというのが現時点での結論である。標準的日本語の名詞列挙構文がかならずそなえていなければならないと判断される韻律的特徴を列挙形式ごとにまとめてみよう。まずゼロ形式の場合。

(Z1) 名詞のあいだにポーズをおく。

(Z2) ポーズの直後で句頭の上昇を実現させる。

(Z3) 列挙される名詞が有アクセントであればポーズを省略することもゆるされるがその際は句頭の上昇を実現させる。

ここで Z3 は Z1 への例外規定である。つぎにト形式の場合。

(T1) 名詞間にポーズをおいてもおかなくてもよい。

(T2) ポーズをおく場合はポーズの直後で句頭の上昇を実現させる

実質的には (T2) だけがト形式に要求される韻律的特徴である。

参考文献

川上 素 「言葉の切れ目と音調」, 『国学院雑誌』, 62, 5, 1961.

Kubozono, H., *The Organization of Japanese Prosody*, Ph.D. Thesis, University of Edinburgh, 1988.

Pierrehumbert, J.B. and M.E. Beckman, *Japanese Tone Structure*, MIT Press, 1988.

Selkirk, E. and K. Tateishi, "Syntax and downstep in Japanese," in *Interdisciplinary Approaches to Language: Essays in Honor of S.-Y. Kuroda*, C. Georgopoulos and R. Ishihara, Ed., Kluwer Academic Publishers, 1990.